



Published by the SWADOM

2016

India

Study Tour Report

Osaka University Students' International Affairs Study Group

Study Group

Contents

1. スタディーツアー概要
2. Tripathi Madam
3. デリー大学 ディスカッション
4. 東芝訪問
5. 観光〈アグラ・チェンナイ〉
6. 政府機関訪問
7. スタディーツアーを終えて

1. スタディーツアー概要

文責：岡田 健治

■目的

スタディーツアーを行うにあたり、「インド人と日本人の“思想”の違いを知る」ことをテーマとして掲げました。日本人とは異なるインド人の考えや考え方を知り、インドとの対比の中で日本をとらえ直すことを目標とし、インド人や現地の発展に貢献されている方々とお話をする中で上記のテーマに迫ることができるよう、政治、経済、教育の3分野でコンテンツを決定いたしました。また、本ツアーにおいては北インドにとどまらず南インドを訪問することが叶いましたので、北と南の地域差やインドの多様性を学ぶことを第二の目的といたしました。

■日程

Date	内容	Date	内容
9/3 Sat	関西国際空港 発	9/10 Sat	観光 マハーバリプラム、ポンディシェリ
	インディラ・ガンディー国際空港 着	9/11 Sun	観光 チェンナイ
9/4 Sun	Tripathi Madam による講義(※1)	9/12 Mon	チェンナイ港 発
9/5 Mon	観光 アグラ		インディラ・ガンディー国際空港 着
9/6 Tue	休養		佐川様との食事会 (※2)
	Tripathi Madam と伝統舞踊鑑賞	9/13 Tue	観光 デリー
9/7 Wed	ディスカッション デリー大学	9/14 Wed	観光 ジャイプール
9/8 Thu	TIPL / TJPS グルガオンオフィス 訪問	9/15 Thu	財務省 Arun Jaitley 財務大臣 訪問
	インディラ・ガンディー国際空港 発	9/16 Fri	日本大使館 訪問
チェンナイ空港 着	インディラ・ガンディー国際空港 発		
9/9 Fri	TJPS チェンナイ工場 訪問	9/17 Sat	関西国際空港 着

※1 Tripathi Madam 元外交官。(詳細は後述)

※2 佐川正宣様 TJPS(後述)の若手日本人駐在員。本団体 OG・大木香奈さんの同僚。



(Shashi Tripathi Madam 私邸にて)

■参加者

木嶋 優斗〔代表〕

大阪大学 外国語学部 ポルトガル語専攻 5年

岡田 健治

大阪大学 基礎工学部 化学応用科学科 化学工学コース 2年

小林 祐美

大阪大学 法学部 国際公共政策学科 2年

山田 葵

大阪大学 法学部 国際公共政策学科 2年

堺 裕哉

大阪大学 法学部 国際公共政策学科 1年

田坂 日菜子

大阪大学 法学部 国際公共政策学科 1年

(以上6名)

2. Tripathi Madam

文責：小林 祐美

■経緯とご紹介

元外交官であられる Shashi Tripathi Madam（以下 Tripathi Madam）とのご縁と絆は、本団体の外部顧問である阪本倉造氏がお会いした 2003 年に遡り、大阪国際問題研究会 SWADOM の学生達へという強い想いのもと、代々先輩方に引き継がれ大切に発展されてきたものです。

Tripathi Madam はインドの外交官として、1970 年の入省から 30 年間にわたり、ご主人である故 Manilal Tripathi 元駐日インド大使と共に、国際舞台の最前線でご活躍されてきました。アメリカ同時多発テロ時のニューヨーク総領事であり、当時ツインタワーで働いていた多くのインド人のために奔走なさったとお聞きしております。駐ポーランド大使、駐ジンバブエ高等弁務官、駐カナダ高等弁務官を経て Secretary (West) として複数の国を管理なさりました。退官後は Union Public Service Commission として、インド政府機関の人事をご管理される立場でご活躍されています。

■お話から学んだこと

4 日、私邸での講義では、学生個人の関心に任せて様々なアカデミックな議論をさせていただいた他、生き生きとしたインド人像をイメージさせていただき、今回のテーマ「インド人と日本人の思想の違い」について考えるうえで重要な基礎ができました。また前学習として Tripathi Madam からの宿題に読んでいた Jawaharlal Nehru が獄中にて娘に宛てて書いた歴史書、‘The Discovery of India’の他、インドの社会問題を如実に描いた ‘No Full Stops in India’が知識のベースとなりました。

「インドは自ら進んで戦争をしかけたことがない」ことやアメリカとの強まる同盟事情、より力を持つ相手に対して持つべきは、「友達、倫理、最小限の力」の 3 つであるなど、はっきりとした会話がなされました。「イギリスではなく、そうさせた制度を憎め」という Mahatma Gandhi の言葉の引用からは、社会の見方を学ぶことができました。

興味深いのは、Tripathi Madam から教わったインド人の思想です。ここではその中から特に印象的であった3つだけを取りあげます。まず、インド人にとっての時間は一本の線であり、永遠に続くものであると伺いました。この考え方から、交渉の場になるとインド人は時間を惜しまず交渉に費やすため、「何時何分」と区切る日本人にとって交渉が難航する一因となっています。次に、インド人は問題に直面すると、計画を立てる前にまず動いてみる国民性を持つそうです。これは見方によっては、植民地時代にイギリスが立てた計画にただ従い動くしかなかったという歴史の負の遺産ということもできます。ただし注意したいのは、インド人はもともとインダス文明のモヘンジョダロに代表されるような高度な下水システムを計画するだけの能力をその実行力と同じだけ持ち合わせていたということです。最後に、インド人は規律・命令に従うのを好まないと教わりました。これをインド人は自分たちの「他の良い代替策を探そうとする」美德として挙げていましたが、Tripathi Madam はむしろそれはインド人の弱みであると説明なさっていました。組織の意思決定には従ったほうが、物事は効率よく進むでしょう。しかし、時に十分な検討や他の視点が欠けたまま判断されていくこともあります。おおよそ日本人は規律に対して厳格であり、そのような日本人にとって、どこまでの意見を聞き取り入れるかは、組織の大小にかかわらずどのようなレベルであっても意思決定における課題であると感じました。

■ご人格より

Tripathi Madam の素晴らしいご人格から、私たちは多くのことを感じました。私たちの英語や論理がいかにか拙かろうとも、懸命に聞き、理解しようとしてくださいました。耳が喜ぶほど綺麗な英語かつ理解しやすい言い回しで明確に回答いただきました。実務やインドからの多種多様な活きた事例に私たちは大いに励まされ、英語の重要性と論述力、話すことへのインセンティブを得ることができました。



当初、今回のスタディーツアーで Tripathi Madam にお会いするのは 9 月 4 日、一度きりの予定をお伝えしていました。しかし実際に会ってみると、もう一度お会いしたいという気持ちにますます駆られ、何度もご予約を伺いました。そして Tripathi Madam も大変お忙しい中、私たちのために計 3 度もお時間をくださいました。ここに、Tripathi Madam のお人柄を伺わせるエピソードがあったため、紹介いたします。

ツアーの 4 日目である 9 月 6 日に、Tripathi Madam にご招待いただき南インドの伝統舞踊を鑑賞する機会に与りました。なお開催地は India International Centre、まだ皇太子であられた明仁天皇が定礎式をお上げになったところです。あと数分で始まるというときに再会を果たすやいなや、Tripathi Madam は私たちがお腹を空かせていることにお気づきになりました。バングラデシュの大使も参加する権威ある会で、Tripathi Madam はまさに主催者であられたにもかかわらず、喫茶でまず私たちにご馳走くださいました。会に遅れさせてしまうのではないかと私たちは気が気でなかったのですが、Tripathi Madam は焦るような素振りを一切お見せにならず、私たちを穏やかに、温かくもてなしてくださいました。舞踊にも感動する中、底知れぬ慈悲深さに感銘を受けたひとときでした。

インドでは、訪問者はみな神様であるといわれます。しかしそれを差し引いても、私たち学生が感じた愛情は溢れに溢れたものであり、とりわけご私邸にていただいたインド料理は絶品で、この上なく幸せな時間を送ることができました。知識、教養はもちろんですが、人格の理想像までもいただいた交流となりました。

■まとめ

講義内容からはもちろんのこと、Tripathi Madam の立ち振る舞いからも多くのことを学ぶことができました。大学時代には英文学科で学んでいらっしやったそうですが、様々な外国・思想に触れたことはのちの仕事の助けとなり、そして欠かせない要約のスキルを身につけられたと仰っていました。私たちが現在大学で学んでいることを生かしていくための考え方、また、それを持つ意義を強く感じました。

更に、大変光栄なことに、この度 Tripathi Madam に当公認団体最高顧問への就任をご承諾いただきました。これまで受け継がれてまいりました人脈に基づき、当団体との間に Tripathi Madam からご教授いただける関係が公式に構築されたことに感慨深さを覚えます。この関係を大切に、後輩に伝えてまいります。

3. デリー大学 ディスカッション

文責：田坂 日菜子

■概要

今回のスタディーツアーでデリー大学の学生とディスカッションを行うために、7月からデリー大学の Balatchandirane 教授とメールで連絡を取り始めました。2016年3月まで大阪大学へいらしていた教授で、正式顧問の星野俊也先生にご紹介いただきました。今回のスタディーツアーメンバーでもある小林が連絡先を交換して挨拶をしており、それを私田坂が引き継ぐ形となりました。7月に初めてのメールを送り、デリー大学の学生とディスカッションを行いたい旨を伝えますと、快諾してくださりました。その後、今回のディスカッションを担当する山田、田坂を中心としてテーマ決めを行い、教授を通じてデリー大学の学生にプレゼン作成を依頼いたしました。

当日は、大学に着くと5人の女子学生が出迎えてくれて一緒に昼食をいただきました。昼食の時間からお互い積極的に話しかけ、それぞれに会話が盛り上がっていました。昼食後のプレゼン、ディスカッションには Balatchandirane 教授と Ph.D の学生が加わり、議論をリードしてくださいました。各プレゼン後のディスカッションは、日印2名ずつ計4名の3つの小グループで行いました。少人数のためか議論も活発に行われ、設定時間は毎回あっという間に過ぎていったように感じられました。

■プレゼン・ディスカッション

今回のディスカッションのテーマは『教育』です。そもそも、今回のスタディーツアーのテーマが『日本人とインド人の“思想”の違いを知る』ということで、その「思想」の違いを作り上げる最大の原因となっていると考えられる『教育』に目を向けることといたしました。より議論をしやすくするために「進路、職業決定」「教員の教え方」の2つのトピックを設定し、それに基づいてプレゼンを作成しました。

まずは日本側から、堺が日本の教育制度を大まかに説明しました。公立校と私立校で学費に大きな差があること、受験が大きな意味を持つことなどインドと共通する部分も多く、理解しやすかったようでした。

〈進路、職業決定〉

続いて、インド側からひとつ目のトピック「進路、職業決定」についてのプレゼンが行われました。インド側はディスカッショントピックについてのプレゼンの随所に、インドの教育制度についての基本情報を入れていたため、私たちはこれらのプレゼンを聞きながらインドの教育制度について理解を深めることができました。インド側のプレゼンをまとめると、インドでは Science、Commerce、Humanity



の 3 つのコースがあり、どのコースに進むのか 16 歳で決めた後はなかなか別のコースには変えられないということです。また、インドの大学生は学部を卒業した後は大学院へ行って当然という考え方が根付いており、したがって院試の受験競争も激化している現状があります。そのため彼女らはそのことを「二度の受験地獄」と言っていました。

その後のディスカッションでは、「進路、職業決定はいつ行われるべきか」について話し合いました。日本の場合、高校では理系の生徒が大学受験を機に文系へ移る、いわゆる「文転」が一定数見られるのに加え、大学で学んだ学問や学部がその後の職業に直結する場合はそう多くはありません。対して、インドの 16 歳でのコース選択は将来の職業をある程度絞ることにつながりかねません。ディスカッションでは、日本人、インド人双方から、16 歳でほぼ職業の選択肢を絞るのは早すぎるのではないかという声が多く聞かれました。改善策として、職業についての情報を学校が提供したり、専門のカウンセラーを設置して生徒の負担を軽減したりすることなどが挙げられました。いずれにせよ、学生がもっと職業について知識を持ってから職業選択をすべきだという意見が多く聞かれました。

続いて、日本側から山田が日本の専門教育（専門学校など）を掘り下げたプレゼンを行いました。それをもとに、「日本で子どもを育てるならどんな学校に通わせたいか」を考え、各グループで意見を出し合いました。この中で、デリーを含むインド北部では小学校から高校までは私立の学校に通わせ、大学は学費が安く質の高い公立校に通わせるというのが最も一般的だという意見を聞くことができました。なぜなら、インド北部の公立学校はそれほど質が良くない（対して南部は公立校の評判が良い）ため、高校までは私立の学校に通わせて最終目標の大学受験に備えるのだといいます。日本と同様に、インドでも良い大

学に入ってほしいという親の熱意は相当大きいのだと感じました。また、インドで私立校が一般的に普及し受け入れられている理由の一つに、所得の低い家庭に対して政府から学費の補助が出る事が挙げられます。これは日本の生活保護とは異なり、教育に対象を絞った補助のため、所得の低い家庭でも子どもを私立に通わせるという選択肢を生み出しています。この制度は、貧困の連鎖を断ち切るきっかけとして有効であると感じました。

〈教員の教え方〉

休憩を挟んだ後、インド側から「教員の教え方」に関するプレゼンが行われました。多民族国家のインドでは、生徒の母語が異なるため、授業は基本的に英語によって行われます。プレゼンの中では「Heterogeneity(異種混交)」や「Secularism(世俗主義)」といった、私たちが普段見慣れない単語も登場していました。続くディスカッションでは、「教員は多様なバックグラウンド（言語や宗教など）を持つ生徒に対して一律に教えるべきか、またそれはどのように教えるべきか」について話し合いました。そこでは、インドで大切にされている精神「Unity in diversity(多様性の中の統一)」をもとに、同じシステム（学校の制服や授業時間など）の中で同じ教育を受けることが最重要だという意見が出ました。多民族国家インドにおいて統一性を保つためには、最低限共通のルールを守ることが必要だという考えに納得させられ、それがまた彼女たちインド国民にとってのプライドのようにも感じられました。



続いて、日本側から田坂がプレゼンを行いました。ここでは日本の教員について、試験を受けて免許を取ることや、公立校ではカリキュラムに沿って教える必要があることを説明しました。加えて、日本がほぼ「単一民族国家」に近いほどに日本語を母語とする人の割合が高いため、日本の教員の英語力が低く、日本語を母語としない子どもの学校教育が困難になっていることも扱いました。時間の都合でこの後ディスカッション

をすることはできませんでしたが、教員を取り巻く言語の状況が、インドとは全く違うのだということを伝えられたと思います。

■感想・反省

今回のディスカッションは、トピックを複数定めたためにそれぞれの時間が短くなり、どうしても意見を深めきれないままに時間切れになってしまったことが多かったと感じています。そのため、ディスカッションによって、現状に対する改善策や解決案に辿り着いたグループは少なかったことは反省しています。しかし、双方の学生にとって、生の言葉で情報交換が行えたことは、「教育」というテーマを考える上で非常に有意義だったと確信しています。

4. 東芝訪問

文責：堺 裕哉

■訪問の経緯

今回のスタディーツアーでは、『日本人とインド人の“思想”の違いを知る』というテーマの中で、「民間企業におけるインド人と日本人との考え方の違いを学ぶ」ことをひとつの目的としていました。そこで、インドで働いている日本人の方々にお話を伺い、インド人と日本人の仕事観の違いや、価値観の違いからくる困難さなどを学びたいと考えました。幸運にも研究会の創設者である大木香奈さんが現地駐在員として働かれていたので、大木さんの全面協力の下、今回の訪問の実現に至りました。

大木さんが勤めていらっしゃる東芝 JSW パワーシステム社(以下 TJPS)に加え、東芝インド社(以下 TIPL)を訪問させていただきました。TJPS は火力発電所向けの設備に関するエンジニアリング・設計・調達・製造・販売・建設・据付およびサービスを行っていて、拠点はグルガオンエンジニアリングセンターおよびチェンナイ工場です。また TIPL は家電をはじめ幅広い事業をインド国内に展開してきましたが、近年は社会インフラや半導体事業へ移行しています。

■東芝グルガオンオフィス

グルガオンはデリー近郊の都市で、現在急速な発展を遂げています。多くの外資系企業がこの都市に進出しており、今回訪問させていただいた TIPL、TJPS もここにオフィスを構えています。私たちは滞在 6 日目の 9 月 8 日にこのオフィスを訪問いたしました。

最初に TIPL の岡田朝彦社長から直々に会社についての説明を受けたのち、社長や他の日本人駐在員の方、インド人の社員の方から様々な話を伺いました。



日本人駐在員の方々の話で特に印象的だったものを2つご紹介いたします。それは、インド人が計画(Planning)下手だということです。日本人は何をするにも入念に計画を練って、さらにそれを何度も吟味したうえで仕事に取り掛かります。しかし、インド人は計画よりも実行(Execution)を重視する傾向があります。また、インド

には Jugaad(ジュガード)という思想があります。これは、「その場にあるもので、新しいものを創造する」という考え方で、広くインド人に根付いています。植民地時代は仕事の計画を基本的にイギリス側が行っており、インド人は計画を経験することなく実行だけをしてきました。Tripathi Madam のお話にもあったように、このなごりが今もあるのかもしれない。

また、交渉の場にもインド人の特徴が良く表れています。日本人は交渉に入るまでに多くの時間を費やし入念に準備します。インド人も、もちろん準備はしますが、その場の流れで柔軟に変更していきます。さらにインド人は値段交渉になると最初から大幅に値切ってきます。交渉に関してインド人従業員の方にお話を伺ったときに、「日本人は思ったことを口にしないし、“Yes”ではないことにも“Yes”と答えるため、理解の一致で齟齬が生じる。そのため日本人との“Yes”は必ず書面化しなければならない」と仰っていたことも印象的でした。

■TJPS チェンナイ工場

翌日の9月9日、チェンナイのTJPSのタービン工場を訪問させていただきました。この日は最初にTJPSの稲山善昭様から会社と工場の説明をいただき、工場を見学させていただきました。工場見学の後には稲山様に質問を伺うお時間を頂戴し、その後現地のインド人従業員の方々とディスカッションを行いました。そして、最後に日本人駐在員の皆様か

ら昼食をご馳走になりつつお話を伺いました。

工場では火力発電所のタービンの羽根1枚1枚の製作から部品の熱処理、超音波検査、削り、組み立てまですべての工程を行っていました。そのため、工場内は部品をクレーンと台車でスムーズに移動させられるような構造になっていました。工場内の機械はひとつひとつがとても巨大だったため、全容を把握するのが大変でした。最終的に組み合わされた発電機ステータはひとつ400トンもあるため、港まで運ぶ際は重量を分散するために、16軸のトレーラに搭載して運びます。また工場が進出するにあたり、州政府や日本政府の支援を受けて港までの道をその重さに耐えられるように工事を行ったと伺いました。

インド人社員の方々とのディスカッションや日本人駐在員の方々との昼食会では日本人とインド人の仕事観の違いを取り上げました。日本人駐在員の方々には、日本からの技術移転の際にはインド人が理解できるように行間を埋めるように詳細な説明を加えたり、インド人の宗教心を寛容に受け入れたりする必要がある等、海外で働くうえでの苦勞も教えてくださいました。また、本社の方針と異なる方向へ向かうのではないかと、不正が起きるのではないかなど、会社を完全現地化することの難しさも伺いました。

ここで、日本人駐在員の方の話の中で印象に残ったことを2つ紹介します。

〈合理性の違い〉

日本人はひとつのシステム(会社)の中で時間のロスや人間関係の崩れを生まないように仕事をします。マックス・ウェーバーの言葉を借りるとこれは形式合理性(Formal Rationalism)と表されます。それに対してインド人はシステムに縛られず、自分で考えて臨機応変に仕事をします。この合理性は実質合理性(Material Rationalism)と表されます。この日本人とインド人の



合理性の違いは交通の面で顕著にみられます。例えば日本人の場合、赤信号で止まっているときは車が来ていなくても信号が青になるまで待つことが多いです。しかしインド人は車が走っていなければ赤信号でも進みます。他にも、車を運転していて赤信号で止まるとき、日本人は車線を守って前に詰めますが、インド人は車線を無視して車と車の間を埋め

るように前に詰めます。これは日本人からすると無秩序に思えるかもしれませんが、列が短くなるという実質的な点では合理的といえます。このように、日本人とインド人では合理性の形が異なるのです。

〈転職について〉

日本社会では終身雇用が主流ですが、インド人は転職をして当たり前だと考えています。インド人社員の方によると、インド人は日本人のようにひとつの事を突き詰めるよりも、様々なことに挑戦しより多くの技術や経験を習得するために転職するのだそうです。それに加え、企業が新入社員に求めるスキルも日本企業より高いことが転職を促す要因のひとつとして考えられるそうです。しかし日本人駐在員はインドの環境の面から他の理由を教えてくださいました。インドでは、元々退職金制度が充実していないのに加え、インターネット上での企業の求人活動が盛んなのです。実際に TJPS のインド人従業員の 8 割が求人サイトに登録していると伺いました。また、インドで転職先の企業で給料に関する交渉を行うことは普通で、おおよそ前の会社の給料の 1.3 倍の給与を基準として交渉を行うそうです。このように、インド人は自己成長と昇給の主に 2 つの理由で転職を繰り返します。そのため、インドでは人材はストックするものではなく物資と同じくフローなものであると考えられています。

上記の 2 つの項目の他にも様々なお話を伺うことができました。インド人をよく表しているといわれる表現があります。TTT(Talk Talk Talk)、MFA(Me First Attitude)、PTB(Pass The Buck)で、それぞれよくしゃべる、自分の状況を第一に考えて相手の状況を考えない、責任を転嫁する、という意味です。これを LLL(Listen Listen Listen)、CFA(Customer First Attitude)、BSH(The Buck Stops Here)に変えていこうとする活動が一部のインド企業に見られるそうです。

また、インド人の時間感覚について稲山様から興味深い話をお聞きしました。“Time is money”ということわざは、西洋や日本では私たちのイメージする「時は金なり」という意味で捉えられていますが、インド人の感覚では「時間をかければ値段は下がる」という意味になり得るそうです。この話を聞いて、「インド人はインド哲学にあるように、時間を直線状の永遠に続くものと捉えている」という話を思い出しました。交渉の際にインド人が時間を気にせず粘り続けるのも、転職を繰り返して自分の人生を豊かにしようとするのも、インド人が日本人よりも時間に縛られずに生きているからではないかと考えた瞬間でした。

■所感

今回東芝を訪問させていただき、インド人と日本人の違いについてお話を伺って、日本企業がインドで現地化することがどのようなことなのか実感として理解することができました。インド人に対して様々な点で配慮が必要であり、また、彼らの能力を活かせるシステムを構築していく必要があります。しかし、日本とインド、それぞれの得意とするところを発揮し、お互いに欠けている点を補い合うことでビジネス面でも強い力を発揮することができると思います。

5. 観光〈アグラ・チェンナイ〉

文責：山田 葵

■洗礼を受けたタージ・マハル



インドで見た建築で私たちの心を捉えて離さないのは、やはりタージ・マハルです。インドの北西部に位置するアグラで最も有名なイスラム建築の巨大霊廟、タージ・マハル。真っ白で壮観なそれは、約 22 年かけて 1653 年にムガル帝国第 5 代皇帝シャー・ジャハーンによって、愛妻ムムターズ・マハルの墓として建造されました。インドで

見たどの建築物よりも壮大で、それでいて美しくきらめく大理石の建物は、インド人、外国人問わず平日でも多くの観光客を魅了していました。

私たちの目的は夕日に照らされたタージ・マハルを見ることでした。タージ・マハルの建築様式の優れているところは、他と色の違う窓のように見える部分は全て、色を変えて作られているのではなく、大理石をくり抜き、そこへ光が色々な方向から当たることによって表情が変わるよう設計されているところです。



私は庭園と霊廟内を見て回った後、日が傾くまで霊廟の外縁に腰掛けて居ました。すると、若いインド人の家族に声をかけられ写真を一緒に撮ってくれないかと頼まれました。どうやらパンジャビスーツ（インドの伝統衣装）を着た日本人に興味を持ってくれたようで、私は素直に嬉しくなりました。伝統衣装を着ているだけで、現地の人々との会話のきっ

かけになることが嬉しく感じられました。もしこれが日本であればきっかけにすらならなかったかもしれません。その後も何人かと話し写真を撮ると、夕焼けはすぐに訪れました。黄色く穏やかな光に照らされたタージ・マハルは、全てを忘れさせ、視線を釘付けにしてしまうほど綺麗でした。日本とは違ってゆっくりと流れる時間を存分に味わい、人々と温かい交流を持つことができ、滞在 2 日目にして初めてインドという国から洗礼を受けたようでした。

■ガネーシャ流し

もうひとつ鮮明に記憶に焼きついているのがインドの伝統的なお祭り、ガネーシャ流し (Ganesh Chaturthi) です。ガネーシャはヒンドゥー教で知恵、学問、商売の神といわれています。毎年 9 月の新月から満月までの 10 日間、町ごとにガネーシャの大きな置物を作り、広場に飾って祈りを捧げます。満月の日になると、厄除けを祈願してそのガネーシャを川に流しに行くのです。

私たちがチェンナイにいた 11 日はガネーシャ流しが行われる日でした。ここでは川ではなく海にガネーシャを流します。私たちがマリーナビーチに行き、ガネーシャが到着するのを待っていると、ガネーシャを荷台に乗せて、太鼓を叩き歌いながら、次々とトラックがやってきました。車には子供から大人まで年齢様々の男性が乗っており、ガネーシャをクレーンで運び下ろしたあとは、火を焚いて清め、海の中へ担いで持って行きました。ビーチは波が荒く、ガネーシャはすぐに波にさらわれましたが、彼らは頭が取れてしまっ

ても、できるだけ遠くの海へ送り出そうとしているようでした。お祭りが行われている間は終始、太鼓や歌があり賑やかで、ガネーシャ流しを見に来た女性や子供も多くいました。

私たちが見たガネーシャ流しは、まさに町ごとの特色を出し合う祭りでした。ガネーシャの塗り方はそれぞれで、とにかくカラフルにして目立たせるようにしていました。またガネーシャをトラックで運ぶ際に歌う音楽もそれぞれで異なっており、すべての町がそれぞれ自分の町のアイデンティティーを強調し、それを男性たちが団結して押し出すという形をとっているようでした。私はこれを見て、確かにインド独特の祭りではあるけれど、日本の京都の祇園祭の山鉦巡行や、町内ごとにある山車を披露するお祭りなどと、地域ごとの団結を強め、今後の繁栄を祈願するお祭りである点で似ている部分があると、大変興味深く感じました。

ガネーシャ流しが環境問題に発展している場面にも遭遇しました。ガネーシャは海に流される時、燃やされたりするのではなく、そのまま流され、海の漂流物となります。ガネーシャの素材は近年中国から来た安い材料を使って作られているようで、水の汚染などが危険視されているということです。しかし、インドはゴミの分別という概念も公共の場でようやく導入されたばかりで、お祭りの場で環境汚染が問題視されることは少ないといえます。伝統を守りつつ、環境に負荷をかけない祭りとしてこれからも続けることが今後重要になると感じました。

■まとめ

今回の観光では日本とは異なるインド文化に数多く出会う中で、同じように日本と似た部分も多く感じました。このことが、日本から見たインドを、より親近感を持って捉えることができた要因のひとつだと思います。日本にあるインドのイメージは独特で謎めいた雰囲気であるために、インドへの日本人観光客は年間たったの約3~4万人です。インド各地を観光して知った本当のインドが、魅力に満ちている訪れるべき国であるということ、インドを訪れたことのない日本人に伝えていく責任を強く感じました。

6. 政府機関訪問

文責：木嶋 優斗

様々な場所へ赴き、様々な人から学ばせていただいたスタディーツアーも残り2日となった頃、ツアーの総まとめとして、インド財務省、在インド日本大使館を訪問させていただきました。それぞれ Arun Jaitley 財務大臣、平松賢司駐インド日本国特命全権大使を表敬訪問し、2週間のインド滞在で学んだことを報告いたしました。お二方とも非常にお忙しい中快く学生を迎えてくださり、我々学生にとっては一生の思い出になるような貴重な時間を過ごすことができました。両訪問について、時系列（9月15日：財務省表敬訪問、9月16日：大使館表敬訪問）に報告いたします。

■財務省表敬訪問



今回の訪問に至ったのは、2016年6月2日に Arun Jaitley 財務大臣が大阪大学で特別講演を行ってくださったことがきっかけとなりました。事の発端は4月、当研究会の顧問である星野俊也先生のもとに T.Armstrong Changsan 在大阪・神戸インド総領事から、大阪大学で大臣の特別講演会を

開催したいという旨の連絡がありました。そこで2014年に当時の在日インド大使である Deepa Gopalan Wadhwa 大使の講演会を主催した当研究会にお声かけいただいたことで、我々が大臣の講演会の主催団体として、僭越ながら名を連ねさせていただきました。この度は大臣が特別講演をしてくださったことに対する御礼の意味も込めて表敬訪問する運びとなりました。

表敬訪問したのは9月15日のことでしたが、前日から各々が大臣の前で話すべきことを原稿にし、何度も何度もリハーサルを重ねて当日を迎えました。40分前後の懇談を含め、約1時間省内に滞在いたしました。その間メンバー一同はこの2週間経験したことがな

いような張りつめた空気の中にいました。しかし大臣にいざお会いすると、どのメンバーも堂々と役割をこなし、わずか 2 週間の間に自分たちが大きく成長できたかのように感じられました。

懇談の時間の中では、6 月に講演をしていただいた御礼、日本から持参した扇子、講演会の際の写真(佐伯健三氏撮影)、そして学生からの手紙を記念品としてお贈りいたしました。大臣は扇子を大層気に入られた様子で、笑顔で扇がれるのを見て学生たちの緊張が吹き飛んでいくのを感じました。その後スタディーツアーで学んだことを大臣に報告いたしましたが、大臣は学生の目をしっかりと見てお話を聞いてくださいました。最後に学生から、次回以降のスタディーツアーでも、学びの総まとめとして大臣を訪問させていただきたいとお伝えしたところ快諾してくださり、最後まで大臣の大きな器に圧倒される 40 分間となりました。

■大使館表敬訪問

スタディーツアー最終日、9 月 16 日に平松賢司在インド日本国特命全権大使を表敬訪問し、2 週間の報告をいたしました。今回の表敬訪問は、研究会卒業生で現在は外務省に勤務されている井上ゆりえさんの助言を得て、外務省大阪分室の宮本倫子様からご紹介いただいた児玉大輔在インド日本大使館一等書記官にアレンジを



していただき、実現いたしました。平松大使とは、今回の参加メンバーの一人である小林が昨年新旧大使交代の式典の際にお会いしておりますが、それ以外のメンバーは初めてお会いしました。しかし、大阪の高校を卒業され、大阪大学で国家試験の勉強をされていた大使とはどこか親近感を覚え、親身になって拙い話を聞いてくださる大使に、学生からも次々と質問が飛び出しました。

インド人と日本人の考え方の違いについて学生なりに学んだことを報告すると、大使はご自身の経験から、政府のやり取りにおいても大変なご苦勞があったこと、その中で生まれた人間関係は今でも続く大切なものであることとお話ししてくださいました。また、山田から日印の文化交流、特に若者の交流について意見を申し上げますと、大使も同意してください、大使が進められているプロジェクトについて教えてくださいました。その時の心から楽しそうにお話しされる姿を拝見し、大使が本当にインドを愛しておられていることがひしひしと伝わってまいり、平松大使のような方こそ、日印が一層親密になっていく過程において必要な方なのだ、と深く感銘を受けたことを覚えております。

7. スタディーツアーを終えて

文責：岡田 健治

「インド人と日本人の“思想”の違い」を探ることを目的とした本ツアーでは、実に多くのインド人、日本人の方々にお会いする機会に恵まれました。2週間という期間を過ごしたインドで、私たちはインド人の基本的な国民性、仕事に対する考え方の違いや、時間感覚などについて踏み込んで学ぶことができたと考えています。最後になりましたが、まとめとして「インド人と日本人」および「インドと日本」について考察と所感を述べて報告を終えたいと思います。

■インド人と日本人

まずインド人と日本人で異なる性質として感じたのが、時間感覚の違いでした。インド人を相手にしていると何かと時間がかかり、注文、交渉に時間がかかることは承知済みでしたが、レジ打ちや空港職員でさえ急ぐ気配もなく話をしながら行っている姿は当初衝撃的でした。上述のように、時間におおらかなインド人のこの感覚はインド哲学に起因し、彼らは始まりも終わりもない一本の線として捉えているということです。一方で日本人は今や最も時間に厳しい国民のひとつといわれます。程度の差はあるとしても日本にも時間におおらかな時代があったことを考えると、これは特筆すべき変化です。

次に、自己の捉え方の違いについてですが、インド人の自己は強固に確立しており、自らを他者との関係の中でも揺るがない、最優先される存在として考えているのではないかと感じました。対して、日本人は他者との関係性に自己を見出す傾向があると思います。

日本人が曖昧な自己が侵されるのを防ぐために他者と一定の距離感を保つのに対し、インド人は自己が確立しているがゆえ、他者とよく話し、近い距離で接することができるのだと考えます。

このインド人の自己が他の形で現れているのが「Me First Attitude」だと思います。彼らの振る舞いには自分の地位を奪われたくないという意思が働いており、このことを何度も実感いたしました。仕事の現場では各人の仕事の線引きが決められていて、担当を跨いだ仕事はできないようです。線引きが曖昧なまま、何となく他者とコミュニケーションを行って仕事をする日本人とは、全く異なります。日本的な自己とインド的な自己、どちらが良いというわけではないですが、インド人のこうした考え方は、日本的な考えを持つ私にとっては衝突の原因ともなり得るもので、まさに異文化でした。

■インドと日本

〈インド〉

インドはその多様性と、上にも挙げたおおらかさが特徴であると感じました。まず何といてもインドは多様性の国家で、「Unity in Diversity」という表現がインドを表す言葉として用いられます。先進国に見られる「移民国家」の多様性とは異なり、多様な宗教、言語、民族、文化が歴史的にもつれ合って共存している状態を目の当たりにしました。何度も多様性を目にするにつれて、何が多様性(Diversity)を維持し、何が統一(Unity)をもたらしているのかという疑問が生まれました。



まず、州に強い権限を与えていることが、地方の多様性を守っていると考えられます。例えば、タミルナドゥ州では、公用語としてタミル語が使われていました。このように州独自の決定が文化・言語を保護している面が存在します。また、教育の現場で全ての宗教を平等に扱っていて全てを一通り習う、という話を伺いました。このように多様性を受け入れる社会構造、システムがインドには存在するのだと考えられます。

一方で、統一性をもたらすものは何でしょうか。言語面では英語が国土全体で話されています。宗教面ではヒンドゥー教が広い地域に信者が存在し、インドの国としての統一感を持たせているのだと考えられます。また、現在の国際情勢における発展途上国の代表たるインドの立場や、イギリスの植民地から独立した歴史、そして勝ち取った民主主義の価値観が国民全体に根付いていることも、国民を束ねる作用を持つのだらうと思います。

しかし、インドの「多様性の中の統一」はかなり微妙なバランスで成り立っているのではないかと感じます。実際、宗教間の対立は解消されておらず、融和は簡単なことではないと考えられます。したがって、上に挙げた事例のみで国としてのインドが安定化するとは考えにくいと思います。今回見てきたインドは多様性の中のほんの一部分だと実感し、まだ認知、理解していない要素が少なからず存在するのではないかと感じられます。

多様かつおおらかである一方、インドは山のような問題を抱える国でもありました。山積みの問題を目の当たりにすると、問題は避けるべきと考える我々日本人にとってインドは不思議な国に思えます。しかし、貧困、カースト、環境汚染、人口増加、宗教対立など、そこらに問題があるにも関わらず、国として見たときには十分動かせるだけのエネルギーがあると感じました。インド人には、何か問題が生じた際、その場で何とかする能力があります。また、非常に優秀な人材が正しい方向へ国を導いているため、この国は回っているのだらうと思います。

これからインドも近代化が進んでいき、効率化して、今ある問題もアジアの国・発展途上国としての特徴も減っていくのかもしれませんが、その時どれだけインドらしさが残るのでしょうか。

〈日本〉

インドとの比較で見えてくる日本は、ある面では近代化したことで特徴を失った国で、またある面では優秀な工業国でした。

今まさに発展の途上にあるインドに対し、日本は西洋に近い性格を持つ無特徴な国のように思えます。近代化によって、景観や人々が持つ「日本らしさ」や、方言をはじめとする国内の多様性を失ってきたことは否めません。特徴的だといわれる伝統文化も今や存続の危機に瀕し、保護の対象となっているものも少なくありません。時に人間味に溢れすぎているインドに対し、日本が冷たい国のように感じることもありました。このインド

で感じられる人間味は、程度の差はあれ、おそらく昔の日本にあったものだと考えます。それはアジアに共通する性質なのかもしれません。近代化の中で日本はかなり西洋化した、その過程で失ったものがインドにはまだあるのではないかと思います。



日本にとって近代化するという事は、工業化するという事でした。そして、今なお日本はアジアでも優れた工業技術を持つ国です。したがって、日本企業の製品もインドでたくさん見つけることができました。訪問させていただきました東芝の製品がインドで認められつつあることも、優れた技術あつてのことです。街中ではスズキやトヨタな

ど多くの日本車が走っていましたし、日本企業の広告を見つけられました。ただ、良いものを作れてもコストの面で SAMSUNG など韓国等のメーカーが受け入れられているのも事実です。これは特に小型のデバイスや電化製品で顕著に現れているように感じます。

日本のモノがインドでも見つけられるとはいえ、インドと日本はまだまだ遠い国であると改めて認識しました。ここでいう遠さ、すなわち両国間の人的交流の少なさを特に強く感じたのは飛行機の中でした。関西国際空港と経由地の香港の間の搭乗率が著しく低かったのです。地理的な要因があるのは否定できませんが、それでもインドに詳しい日本人はごく少数であり、日本では大学かインド料理店でない限りインド人を見かけることはほぼないと言って良いでしょう。更には、日本ではインド好きは特殊な人だと思われてしまいます。相互理解がまだまだ進んでいないのだと感じます。

状況を変えるには、インドは汚くて危ない場所だというイメージを変えていく必要があります。そのカギが私たち若者なのだと、インドが面白い国であると伝えてほしいと、大使は仰っていました。これまで私は、国と国との関係に関わることはハードルが高いことだと身構えてしまっていたのですが、インドでの体験を発信するという小さなことでも両国関係に貢献できるのだと気付かされました。今回得た貴重な機会、経験をもとにインドについてさらに深く学び、より積極的に両国間の関係に関わっていきたいと考えています。

■謝辞

今までお世話になってきた多くの方々の多大なご協力のもと、今回のスタディーツアーが実現したものと考えています。研究会正式顧問の星野俊也先生、最高名誉顧問の中山太郎先生、公益財団法人日印協会の平林博理事長先生、T. Armstrong Changsan 在大阪・神戸インド総領事、外務省大阪分室 宮本倫子様、そして研究会創始者である TJPS の大木香奈先輩をはじめ、多くの方々にお世話になりました。

またインド滞在中には、Shashi Tripathi Madam、デリー大学の Balatchandirane 教授、岡田様、稲山様を始めとする TIPL、TJPS の皆様方、Arun Jaitley 財務大臣、平松賢司在インド日本国特命全権大使、大使への表敬訪問をアレンジしてくださった在インド日本大使館の児玉大輔様、皆様に学生にとっては望めど得難い、貴重な経験をさせていただきました。ご多用中のところ、学生である私たちに貴重な機会とお時間をいただきましたこと、この場をお借りしまして、心より御礼申し上げます。

現在の日印関係があるのは数え切れないほど多くの方々のご尽力あってのことなのだと、この度のスタディーツアーを通して改めて強く感じました。学生、社会人として、両国間関係の発展に貢献できるよう、私たちも日々邁進して参りたいと思います。

カバー・本文デザイン：田中 瑛理香



大阪大学国際問題研究会

SWADOM

SWADOM（大阪大学学生国際問題研究会）は、大阪大学の有志による学生団体で、2016年10月現在19名の現役学生が所属しています。2011年12月に発足し、2015年には大阪大学の公認団体に認定されました。学生による勉強会や、講演会運営などを行っており、国際問題への関心を高め、自らの意見を発信できる人材になることを目指し、日々活動を続けています。Arun Jaitley インド財務大臣の講演会が大阪大学にて開催された際の運営を担うなど、インドとの深いご縁も助けとなり、この度インドスタディーツアーを行うことを決定いたしました。